



5月25日、バチカンのシノドスホールで新回勅「マニフィカ・ウマニタス」の発表をする教皇レオ14世(CNS)



6月10日、教皇専用車に乗ってサグラダ・ファミリア教会に向かう教皇レオ14世(OSV)

教皇スペインを7日間訪問

教皇初の回勅発表

「マニフィカ・ウマニタス」

(AI時代における人間の尊厳の擁護〈仮訳〉)

国際

- 教皇、スペインを7日間訪問
 - サグラダ・ファミリア、若者の集い、スペイン議会など 2面
 - 聖虐待被害者と面会、刑務所訪問、カナリア諸島など 3面
- 教皇、初の回勅を発表 4面
- 教皇の一般謁見講話／その他の国際記事 5面
- G7サミットに関係各司教協会長が共同声明 6面

国内

- 那覇教区バート司教 慰霊の日にメッセージ 6面
- 「聖フランシスコ年」に当たって おだかたけし 小高毅神父に聞く 7面
- 十字架を担いで「道行」・さいたま教区 7面
- その他の国内記事 8面

- 主日の福音解説 9・10面
- 「名著誕生展 ヴァチカン教皇庁図書館Ⅲ+」 プラス 11面
- 短歌・俳句・きょうをささげる(7月の祈り) 11面
- 訃報・告知板・番組 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。本紙は無料です。

カトリックジャパンニュース



カトリックジャパンダイジェスト 第15号
発行=カトリック中央協議会広報部
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
電話(03)5632-4435 FAX(03)5632-7030

教皇、スペイン訪問

サグラダ・ファミリア「イエスの塔」完成 教皇、「美と芸術が人々を神に近づける」

【バルセロナ(スペイン) 6月10日OSV】
教皇レオ14世は6月10日、スペインのバルセロナに建つサグラダ・ファミリア教会の新たに完成した「イエスの塔」を祝別した。また教皇が、この塔の落成式を記念したことによって、このバルセロナを象徴する教会は、高さ世界一のカトリック教会となった。教皇は人々に、まなざしをキリストへ向けるよう促した。

「キリストだけが、私たちに神についての真理、私たち自身についての真理を明らかにしてください」

教皇は教会の中でミサを司式し、高さ約172メートルとなる「イエスの塔」の落成を、何千人もの人々と共に記念した。

戦争、人工妊娠中絶、 移住者の排除に反対するアピール

約9000人の人々が、聖堂内で教皇司式のミサに参列し、およそ12万人が聖堂の外で礼拝した。説教の中で教皇は、人工妊娠中絶、戦争、移住者の排除に対する力強いアピールを行った。

「親愛なる兄弟姉妹の皆さん、私たちは戦争を推進しながら、イエスを信じることはできません。誕生前の子どもを殺すなら、イエスを信じることはできません。苦しむ人、涙を流す人、悲惨な状況から逃げる人を見捨てるなら、イエスを信じることはできません」



記事
全文



6月10日、サグラダ・ファミリアで行われた教皇ミサで入堂する聖職者たち(OSV)

マドリードの王宮でスピーチ

【マドリード(スペイン) 6月6日OSV】教皇レオ14世は6月6日、ローマから2時間半のフライトを経て、現地時間午前10時10分ごろスペインの首都マドリードに到着した。「スペインを訪問したのは、信者の皆さんがあらためて福音に忠実であるよう支え、励まし、力づけるためです。同時に、スペインのさまざまな人々の間のより一層の和解と協力が深まるためです」と、教皇はマドリードの王宮で行ったスピーチの中で語った。

「現在、二極化をあおって、国民の支持を得ようとする誘惑は減少するどころか、大きくなっているようです。そして人間の尊厳は侵害され続けています」「だからこそ、私たちは文化、内面性、無償の質の良い教育を必要としていますし、超越的存在を必要としているのです」。そして「現代の教会は、和解と平和を求める人々の未来のために、自らをささげる用意があります」と教皇は付け加えた。



記事
全文

「人間らしくあれ」若者の集いで

【マドリード(スペイン) 6月6日OSV】教皇レオ14世は6月6日、首都マドリードの中心にあるリマ広場での夕の祈りに集まった50万人の若者たちに、物事のうわべだけにとらわれず、「血の通った人間」となるよう呼びかけた。「私から皆さんに託す使命は、人間であるように、ということです」「そうです、人間であってください。血の通った人間です!」「キリストのように人間らしくあってください」と繰り返し求めた。教皇はまた、若者たちに現代の生活の中でも沈黙の時を持つよう励ました。聖体礼拝に寄せて沈黙に招く



6月6日、リマ広場での若者たち(OSV)

と、会場は実際に静まりかえった。夜のとばりがマドリードを覆い、音楽やお祭りムードは静寂に包まれた。



記事
全文

聖体行列「主は、今もここに」

【マドリード(スペイン) 6月7日OSV】教皇レオ14世は6月7日のキリストの聖体の祭日に、訪問中のスペインの首都マドリードの中心にあるシベレス広場でミサを司式し、その後聖体行列を行った。120万人以上の人々が通りを埋め尽くした。キリストの聖体は、最も神聖なキリストの御体と御血を記念する祭日。



6月7日、聖体行列での教皇(CNS)

「私たちの間のキリストの生きた現存というたまものである聖体を、私たちは囲んでいます。私たちが御父と交わり、その子どもとなれるように、私たちのためにいのちを差し出すことを望まれたキリストは、生きたパンとして天から降られ、今ここに^{くだ}おられます」。(聖体行列が示すように)「イエスは私たちの日々の生活の中に住まれ、通りを抜けて広場を横切り、私たちの隣人を訪ねられます」と教皇は説教の中で話した。



記事
全文

議会で「いのち守ることは文明の目標」

【マドリード(スペイン) 6月8日OSV】教皇レオ14世は6月8日スペインの議会で、全ての人の尊厳を守るよう強く訴えた。尊厳を守ることは党派的な問題ではなく、「文明化した社会の目標」と強調し、人工妊娠中絶から移住者の問題、良心の自由、ゆるしの秘跡で告白された内容の秘匿義務、一般の生活における教会の役割などについて言及した。教皇は「人間のいのちを守ることは党派的な問題ではなく、個人的な信仰上の問題でもありません。人間の文化の目標なのです」と強調。「全ての人のいのちは、いかなる状況にあらうとも受精の瞬間から自然死に至るまで認められ、守られなければなりません」と訴えた。



6月8日、議会で拍手を受ける(OSV)

教皇がスペインの議会で演説するのは史上初めて。深い政治的分断に直面しているスペインで、教皇の演説は人々の注目を集めた。



記事
全文

教皇、スペイン訪問

性虐待被害者と面会

【マドリード（スペイン）6月8日OSV】教皇庁広報省は6月8日、教皇レオ14世が同日、聖職者による性虐待被害者6人と面会したと発表した。6人は、緊密に連絡を取り合っている教会関係者に付き添われて教皇と面会した。「約1時間に及んだ会話の中で、まずは被害者が痛ましい個人的体験を語り、またそれぞれがこのような重大事案に対する教会の取り組みが実効性を高めるよう、いくつかの提案を行った」と声明は述べた。バチカンによると、教皇は「愛情を持って、注意深く、体験に耳を傾けた」。そして「示された提案が、さらなる取り組みの基礎となり、教会が真に安全で霊的に健全な場、つまり傷が慰められ、癒やされる場となるよう」あらためて決意を表した。この面会の前に教皇はスペインの司教団と会い、「教会共同体は、傷つけられた全ての人々が、心からの傾聴、温かな受け入れ、保護、癒やしにつながる真の道を見いだせるようにしなければなりません」と語った。



6月8日、性虐待被害者と面会(OSV)



記事全文

心に傷を負った人々の声を聴く

【バルセロナ（スペイン）6月9日OSV】教皇レオ14世はバルセロナ訪問初日の6月9日、リュイス・コンパニス・オリンピック・スタジアムで、うつ病、トラウマ（心的外傷）、信仰の問いを抱える若者たちの個人的な証しに深く聞き入った。そして数万人の群衆に、神の存在が最も遠く感じる時でさえも、神は苦しむ人々を見捨てないと力強く語った。

何年もうつ病に苦しんできた若い女性の話聞いた教皇は、「あなたが今ここに私たちと共にいること、そして主があなたに与えた第2のチャンスを受け入れる強さを、あなたが見いだしたことに心を動かされました」と話した。

「イエスとの触れ合いを通して、喪失感にさいなまれている人々に、人生に自信を取り戻せます。病は癒やされて、再び立ち上がって生きることができるのです」

また教皇は精神的な病を抱える人が増えていることについて、「健全なバランスを損なわせる圧力、期待、緊張に人々をさらす、『進歩』というある種の概念に大きな問題があることを示すし」と呼んだ。「隠然と広まり、若者たちも苦しんでいるこのような病に、優先的に取り組む医療制度が必要です」とも訴えた。



記事全文

刑務所訪問「過去は希望を阻まない」

【バルセロナ（スペイン）6月10日OSV】教皇はバルセロナにある刑務所で、孤独と絶望の中でも神は受刑者を愛し励まし続けており、だからこそ過去の悲しみが未来への希望を阻んではいけないと語りかけた。教皇は6月10日、ブライアン第1刑務所の受刑者とその支援を行っているボランティアの人々に、「人より劣っていると感じたり、生きていく意味がないと考えたりする」誘惑に直面したとき、神を仰ぎ見るよう話した。「不安や悲しみが皆さんの旅路に現れるときでも、人生の過ちが全てを決めてしまうことはありません。主は私たち全員が新たに直出せるようにしてください。人間であることと、キリスト者であることは、間違いを犯さないということの意味しないからです」



受刑者から贈り物を受ける(OSV)



記事全文

人身取引加害者に「今すぐやめなさい」

【サン・クリストバル・デ・ラ・ラグーナ(スペイン)6月12日OSV】スペイン訪問の最終日の6月12日、教皇レオ14世は、人身取引加害者、弱い立場に置かれた人を搾取する人々を強く非難し、「今すぐ手を引き」「悔い改め」、償うことを要求した。教皇はカナリア諸島のテネリフェ島を訪れ、移住者たちを一時的に受け入れるセンターを訪問。移住者たちと面会し、話に耳を傾けた。その後、広場に移動した教皇は、移住者の社会的統合を支援する組織との面会の席で訴えた。「人々の絶望を利用し、死につながる移住ルートをつくり、人身取引を行い、身分証明書を取り上げる人々。労働者を搾取し、女性を脅し、家族をだまし、他者の苦しみをビジネスにする人々に告げます。今すぐやめなさい。そして悔い改めなさい！」と語気を強めた。



移住者たちにあいさつする教皇(OSV)



記事全文

移住者と人身取引の問題に言及

【アルギネギン（スペイン）6月11日OSV】教皇は6月11日から2日間にわたってカナリア諸島を訪問し、人身取引の被害者に向けて、力強いメッセージを送った。カナリア諸島はアフリカの海岸から一番近い、欧州への入国地点となっている。その中のグラン・カナリア島南部の海岸にあるアルギネギン港で、教皇は被害者と、移住者と協力して働く地元の人々と面会し、話を聞いた後、一人一人に対して語った。「親愛なる移住者の皆さん、お話をする前に、まず皆さん一人一人のかけがえのない尊厳を思い、頭を下げます。皆さんは、単に書類の上で数えられるだけの存在ではありません」。教皇はカトリック教会に、移住者問題への取り組みに積極的な役割を果たすよう促し、福音は「私たちを、私たちの前に到着した兄弟姉妹と向き合わせます」と語った。



海で亡くなった移住者のため花をささげる教皇(OSV)



記事全文

温かく人をもてなす共同体へ

【サンタ・クルス・デ・テネリフェ（スペイン）6月12日OSV】スペインへの使徒的訪問での最後のミサで、教皇レオ14世はキリスト者に、ビジネスや利益という誘惑を超えた先を見るよう求めた。むしろ人をもてなすことへの召命と、弱い立場に置かれた人、苦しんでいる人との出会いから得られる知恵を受け入れるよう呼びかけた。また教皇は説教の結びにテネリフェ島の人々への感謝を表した。「優しく、温かくもてなす人々の顔ときょうだい愛に満ちた共同体として、この島をキリストの心に出会う場としてくださっていることに感謝します」。「それこそが福音の心、キリストの心です」と教皇は力を込め、「この海のように深い愛を全ての人に開いてください！」と強調した。



テネリフェ島でのミサ(OSV)



記事全文

教皇 新回勅発表

教皇レオ14世、初の回勅を発表 AIの“武装解除”の必要性強調

【バチカン5月25日CNS】教皇レオ14世は5月25日、教皇庁（バチカン）のシノドスホールで行われた記者会見で、教皇に就任して初の回勅を発表し、人工知能（AI）は“武装解除”される必要があると警告した。教皇は、政府やIT企業の幹部や社会は、急速に進化する技術が人間関係をむしばみ、批判的思考力を弱め、平和自体を揺るがす前に、このような技術に対峙するよう求めた。

回勅は「マニフィカ・ウマニタス」と題され、82ページに及ぶ。この教皇の教えによって、AI、自律型兵器、雇用、人間の尊厳、一握りの企業だけに技術力が集中する問題を巡る議論において、カトリック教会の発言力は強まるだろう。

「平和とは、単に戦争がない状態ではなく、正義が機能している状態を指します」と教皇は語り、「けれども、技術が人間の批判的思考を弱めるならば、平和自体が危

険にさらされることとなります」と続けた。ホールはバチカンの職員や取材陣、また特別ゲストらでいっぱいになった。

教皇は回勅を執筆するに当たり、複数の科学者やエンジニア、政治指導者、親、教師たちに、AIがもたらすプラス面と危険性について話を聞いたという。一部の人はAIに強い期待を示した一方で、

一部の人は、将来の世代や徐々に自律化されていく兵器に恐怖を表したと語った。

教皇はAIの恩恵を認めつつ、まだ開発途上にあるAIをより入念に調査する必要があると断言した。

「AIは武装解除される必要があります。辛辣な言葉ですが、意図して使いました。というのも、現代は注目を集め、良心を目覚めさせ、人間性へと向かわせる道を指し示す言葉を必要としているからです」

教皇は就任当初から頻繁に、安全性の確認が不完全なAIの開発には警告を発してきた。AIは人間の識別能力を低下させ、現実をゆがめ、真の人間関係を人間同士の交流を模倣したシミュレーションで置き換えてしまう危険性があると警鐘を鳴らす。

第60回の世界広報の日のメッセージのテーマに深く根差しながら、教皇はAIがますます「人間の声と顔」を精巧に模倣するようになり、その一方で良心、責任、友情、真理という面に、より一層深い問いを投げかけると述べた。

「それらに対する技術的な答えはありませんし、専門知識を持った人にとって代わろうとすることもありません」と教皇は話す。「けれども、私たちは現代が切実に必要としている人間に関する知恵をもたらすことができます。すなわち、全ての人は唯一無二で、かけがえのない存在だということです」



5月25日、バチカンのシノドス・ホールで行われた回勅『マニフィカ・ウマニタス』の発表会に出席した教皇レオ14世（OSV）

AI兵器の台頭 回勅で「正戦論は時代遅れに」

【バチカン5月25日OSV】新回勅「マニフィカ・ウマニタス」の中で、教皇は戦争の常態化に注目した。戦争の常態化は「紛争の性質を変え」、「防衛と攻撃の微妙な境界線」を不鮮明にしてしまうデジタル革命によって、より一層危険になったと記している。教皇は、正戦論は「時代遅れ」になったとも語った。最も厳密な意味での自己防衛の場合を除き、正戦論はあまりにも多くの場合、あらゆる形態の戦争を正当化するために使われてきた。しかしAIの登場により、武器システムの能力の拡大が可能となった。そのため教皇は、戦争でのAIの使用には「最も厳格な倫理的制約」を求めた。武器自体が、殺傷能力を進化させているからだ。教皇は人々に「戦争とあらゆる形の暴力全般に内在する悪の行き着く果て」を気づかせるために、戦争犠牲者の「視点と声に耳を傾けるよう」促した。「歴史と記憶の両方」が、対話、外交、真の多国間主義、祈りと共に、戦争を防ぐ上で大切だと言及した。



デジタル時代の教育の在り方 回勅「学校との連携が鍵」

【ローマ5月26日OSV】人工知能（AI）やデジタルメディアが急速に広まる中、教皇は、家庭、学校、政策立案者たちに、「デジタル時代に教育界の連携」を築くよう求めた。若者たちの尊厳と知的発達を守ることが目的だ。新たに発表された回勅「マニフィカ・ウマニタス」で、「特定の利益や広報戦略のために真実がしばしばゆがめられる時代において、教育の分野は極めて重要な意味を持ちます」と教皇は記す。

教皇は続ける。学校は「新しい世代が真理を求め、愛することを学べる場であり、人生の意味を熟考し、全ての人の尊厳を認めることを学ぶ場でもあります」。しかし、その学校が、デジタル時代の中で力を失っているようだ、と教皇は危機感を表す。

「学校はデジタル世界のペースに合わせてるように求められているのではなく、デジタル空間自体が提供できないもの、つまり、学び、信頼できる関係を構築するために分かち合う時間を提供することができるとのことです」



奴隷制に加担した教会 教皇、回勅で正式謝罪

【ラルゴ(米メリーランド州)6月2日OSV】教皇は、新回勅「マニフィカ・ウマニタス」の中で、奴隷制にキリスト教が加担したことを認めて正式に謝罪した。これを受けて、全米黒人カトリック会議議長のリョイ・E・キャンベル・Jr 司教は、教皇の謝罪は「適切であり公正だ」と語った。

教会は奴隷制への対応を1800年近くもためらってきた、と教皇は述べ、そのようなためらいは「キリスト教の記憶における、私たちが自分から切り離すことのできない傷です」と表現した。

キャンベル司教は、「教会は奴隷制をゆるしてきた、あるいは見て見ぬふりをしてきたことで共犯だと教皇が率先して認め、そのことに対してゆるしを求めている」と述べた。

奴隷制についてはイエズス会も、それに関わっていたことを認め、2017年に、子どもを含む272人の奴隷とされた人々の約100人の子孫に対して、公式に謝罪している。



教皇の一般謁見講話

典礼は信者を支える 5月20日

【バチカン5月20日CNS】教皇レオ14世は5月20日の一般謁見で、第2バチカン公会議の諸文書についての講話を続け、新たに『典礼憲章』を取り上げた。

「この文書は、典礼によって、私たちがキリストの受難と死と復活と栄光という神秘に浸らせてくれるのだと教えてくれます」と教皇は述べた。

「キリスト教の神秘とは、キリストの受難と死、復活と栄光という過越の出来事を示し、それはまさに典礼の中で秘跡を通して私たちに示されます。ですから、私たちが『キリストの名によって』集うときはいつでも、この神秘にあずかるのです」

典礼は、信者たちを支え、「信仰への決意と使命」の面で信者を勇気づけて新たにし、「全ての人を喜んで迎える開かれた共同体」を形づくる助けにもなるので」と教皇は説明した。



記事全文

真の伝統に基づく典礼の刷新 5月27日

【バチカン5月27日CNS】教皇は5月27日、バチカンのサンピエトロ広場で開かれた一般謁見で、第2バチカン公会議の教えについて、教会の改革は、真の伝統に根差している限り現在の必要性に応じるための正当なプロセスだと述べた。また「正当な進歩への道」が開かれている状態で、「健全な伝統」を保つようにという公会議の呼びかけを何度も繰り返した。

典礼の変更は、教会の歴史を通じて行われてきた。それは信者がより実り豊かに過越の神秘に参加できるように、そして教会の礼拝が歴史を通して、異なる文化にあっても体现できるようにするための変更だったと教皇は述べる。「今日でも典礼の力は、本物の生きたカトリックの伝統とつながって、すなわち信者を完全な真理へと導く原動力に従って、新たにされねばなりません」



記事全文

典礼の儀式と象徴は 神の現存を示す 6月3日

【バチカン6月3日CNS】教皇は6月3日、バチカンのサンピエトロ広場で開催された一般謁見の中で、典礼で行われる儀式や象徴は、恣意的な儀式の寄せ集めではなく、カトリック信者がそれらを通して神と出会い、信仰を形づくる手段だと語った。教皇は第2バチカン公会議の諸文書の一つ『典礼憲章』についての講話を続け、カトリック教会での礼拝における儀式、しるし、象徴が果たす役割について考察した。

「キリスト教典礼の儀式は、単に秘跡の神秘を外面的に覆ったり、恣意的な儀式を集めたりしたものではなく、神のたまものが私たちに届くために教会が行う仲介といえます」。教皇は、典礼の儀式は信者の霊的生活を形づくり、信者たちに神の現存を認識するよう教え、教会の生活により深く参加することも教えてくれる、と述べた。



記事全文

ドイツ司教団の同性婚カップル祝福指針案「協議継続」

【ローマ5月11日OSV】同性婚への祝福を巡る教皇庁(バチカン)とドイツの司教団との協議は継続中で、制裁措置を考慮するには時期尚早だと、バチカンの国務省長官ピエトロ・パロリン枢機卿は5月6日、ローマで記者団に語った。同性カップルへの祝福についての手引書を作成し推奨している同国の司教団に対し、バチカンは制裁措置を取るかと問われて答えたもの。枢機卿は、すでにドイツ司教団と対話を始めており、解決策を見いだせると信じているとも述べた。イタリアの通信社ANSAが報じた。



記事全文

2025年、世界の死刑執行件数最多に

【ワシントン5月18日OSV】5月17日に発表されたアムネスティ・インターナショナルの「2025年死刑判決と死刑執行数」と題された報告書によると、25年は全世界での死刑執行数が過去44年で最多を記録した。アムネスティによると25年には17カ国で2707件の死刑が執行され、1981年以来最多を記録した。

カトリック教会の教導職は、死刑制度に反対している。人間のいのちに本来備わる神聖さと死刑制度は相いれないと考えるため、世界中の死刑廃止を訴えている。



記事全文

エルサレムで諸宗教者による行列

【エルサレム5月19日OSV】宗教指導者たちは5月18日、エルサレムで、「正義」、「信頼」、「平和」を求めるプラカードを掲げて、何百という平和活動家、ユダヤ教徒、ムスリム(イスラム教徒)、キリスト教徒、ドルーズ派などの諸宗教の人々が共に行列した=写真・OSV。4日前の5月14日の「エルサレムの日」には、何千人もの極右のイスラエル人たちがパレスチナ人たちに対し、暴力や言葉による嫌がらせをして回っていた。



記事全文

ソマリアで再び深刻な人道危機 教会、援助継続も

【ナイロビ(ケニア)5月22日OSV】東アフリカのソマリアが世界で最も深刻な人道危機に直面し、再び大惨事の淵に立たされている。「ソマリア全土で、約650万人が緊急性の高い食料不足に陥り、180万人以上の子どもたちが急性栄養失調に苦しみ、そのうち数十万人が深刻な急性栄養失調の迅速な治療を必要としています」と、国際援助団体は5月20日、共同で声明を発表した。ソマリアの使徒座管理者のジャマル・ブロス・スレイマン・デイブス司教は、国際社会による継続的な注目と連帯を求め、ソマリアの、危うく複雑な人道上の現実を指摘した。



記事全文

教皇庁広報省長官に初の女性信徒、史上最年少で

【バチカン6月2日OSV】教皇レオ14世は6月2日、教皇庁(バチカン)広報省長官に、カトリック系メディアEWTNニュースの社長兼最高執行責任者、マリア・モンセラット・アルバラード氏=写真・OSV=を任命した。アルバラード氏はマイアミ出身のメキシコ系アメリカ人で、現在のパオロ・ルッフィーニ現長官の後を継ぎ11月1日に就任する。アルバラード氏は修道女ではなく女性信徒として初めて長官に就く。39歳という年齢で、ローマ教皇庁史上、最年少の長官が誕生する。



記事全文

モザンビークの司教 射殺されて見つかる

【マプト(モザンビーク)6月6日OSV】モザンビークのカトリック教会は、ケリマネ教区のオーソリオ・シトラ・アフォンゾ司教(54)の死に際して、悲しみに包まれている。司教は6月6日の早朝、射殺された状態で司教館で発見された。犯人はまだ特定されていない。モザンビーク中の教会は驚きを隠さない。モザンビークの教会はすでに、カボ・デルガード州で、イスラム過激派からの攻撃を受けるなど、不安定な状況に直面しているからだ。数週間前には、モザンビーク北部のカトリック教会が過激派に標的にされていた。



記事全文

G7サミットに関係各司教協会長が共同声明 人間の尊厳中心に四つの確約求める

先進7カ国(G7)の首脳らが首脳会議(サミット)に向け準備を進める中、G7加盟国のカトリック司教協議会の会長たちは、各国首脳らに国の統治を人間の尊厳に据えるよう求めた。

同会長たちは6月12日、「武力紛争、地政学的な分断、拡大する不平等、気候変動の課題、技術革新といった課題に直面する中で、私たちは、全ての人間の尊厳が、政



G7サミットを前に、レマン湖近くのフランス軍基地ではためく各国国旗(OSV)

治・経済活動の基礎であり続けなければならないと断言します」と共同声明の中で訴えた。

「平和、正義、人間の尊厳のために橋をかける」と題された声明は、6月15日から17日まで、フランスで開かれるG7サミットに先駆けて発表された。G7には米国、カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、日本、英国が含まれ、その首脳は年に一度会合を持ち、国を超えて喫緊の課題に取り組み、グローバル経済政策を取りまとめる。

「G7は、世界規模での共通善に特段の責任を負います」と司教団は述べる。「G7加盟国による決断は、人々、国際的安定、若い世代の未来に対し、直接的な影響を及ぼすからです」

同会長たちは、G7加盟国に以下の四つの確約を求

めた。①多国間主義の再確認と国際法の順守、②開発と国際的連帯の中心に人間を据えること、③デジタル時代の子どもと若者の保護、④被造物と避難民に対する共同責任。

同会長たちは、この声明を「福音と教会の社会教説から着想を得た、各国元首および政府首脳に対する共同声明」と呼び、教会が持つ「対話、仲介、最も弱い立場にいる人々への寄り添いという能力を、平和と国際社会に対して役立てることを望んでいます」と述べている。

この共同声明は、各国首脳に、教皇レオ14世が5月25日に発表した回勅『マニフィカ・ウマニタス』を示し、人工知能(AI)のような「新技術」は、「人間と共通善のために役立つ」ように、各国指導者とテクノロジー企業に対し、「明確な国際法を確立する」ことを求めた。

この共同声明に署名した司教協議会会長は、日本カトリック司教協議会会長の東京教区菊地功枢機卿ほか、G7各国の司教協議会会長。また、欧州連合(EU)司教協議会連盟会長のラティエナ教区(イタリア)マリアーノ・クロチアータ司教も賛同し、署名した。



記事全文

沖繩からの叫び「NO MORE WAR!」

那覇教区司教 慰霊の日にメッセージ

那覇教区のウェイン・バートン司教は、6月23日の「沖繩慰霊の日」に合わせて平和メッセージを発表した。タイトルは「沖繩からの叫び『NO MORE WAR!』」

メッセージはまず、慰霊の日に、81年前の何を思うかを問いかける。

「どこで息絶えたのかも知れぬ家族・親族・友人の在りし日の姿でしょうか。それとも、激しい鉄の暴風にさらされ、焦土と化した痛々しい沖繩の姿でしょうか」

そのような生々しい心の傷を抱えた人が少なくなったことを認めながらも、戦禍をくぐった人々の事実とトラウマ(心的外傷)は「決して消え去ることはありません」と語り始める。そして「彼らと共に私たちも叫びます。『二度とこの戦争の苦渋を誰にも味わわせてはならない!』と」と決意を表明している。

「戦争は悪」と訴える

メッセージは、現在の世界情勢についても目を向け、ガザやウクライナ、中東地域で続く武力衝突によって、多くの人々が命を落としている現状に強い懸念を表明。また「世界中が防衛や主権保護という欺瞞に満ちた理由を掲げ、競うように軍備と軍拡

に囚われて」いると指摘する。

「何も生み出すことない兵器、ただ殺戮と破壊のみを目的として造られる武器、戦争に勝つためのみに訓練され、人間性を奪われ消費される兵士たち。こうしたことは、誰が考えても良くないこと、避けるべきことだと分かっているのに誰もこの戦争を止めることができずにいます。しかし、大義名分をつくり、これ以外に道はないかのように装い、防御防衛を声高に叫んでも、戦争を正当化することはできません」

平和への道は報復の連鎖絶つこと

一切の戦争をなくす平和への道として、メッセージは、報復の連鎖を絶つことだと強調する。

「憎しみからは憎しみしか生まれません。報復は更なる報復しか招きません。その犠牲となるのは、常に弱く小さな者、戦争に加担しない人々です」

沖繩の人々は、「ありとあらゆる地獄を詰め込んだと言われる戦場の体験」を経てもなお誰も恨まないとも述べる。そして「平和の途」を実現するために最も重要な「核心」となるのは、取引でも、駆け引きでも、外交でも、条約でもない述べる。それは、



ウェイン・バートン司教

「悲痛」であり、戦争によってもたらされた「深い深い傷」だと言う。

「海深くひっそりとたたずむ貝は、痛みをもたらす石などの苦痛の種が体内に入ると、もがき苦しみつつも、取り除くことのできないこの痛みの源を何度も何度も撫でて包み込み、やがて光り輝く真珠へと変えるそうです。この真珠貝のように健気で、誠実真摯なウチナンチュ(編集部注:沖繩の人々)が生み出した非戦・非暴力の精神は、まさに真珠のようです」

戦争の傷跡を恨んだり、復讐の根拠としたりするのではなく、また傷を拒み消し去ろうとすることもなく、「悲痛」を反すうし、この苦しみを誰にも及ぼしてはならないと自身のうちに包み込み、その魂を真珠のように輝かせてきたのが沖繩の「絶対平和希求の精神」だとメッセージは述べる。

「この珠玉の精神を大切に、尊重し、それに学ぶなら、実現不可能と思われる真の世界平和が訪れるでしょう。なぜなら、そのような生き様こそ私たちの主キリストの平和の途へと連なる生き方だからです」

那覇教区ウェブサイト掲載の
メッセージ全文はこちら →



国内

「聖フランシスコ年」に当たって キリストが歩んだ道をたどった聖人 小高毅神父（フランシスコ会）に聞く

今年アッシジの聖フランシスコ没後800年に当たる。教皇レオ14世はこれを記念し、今年1月10日から2027年1月10日までを「聖フランシスコ年」と定めた。聖フランシスコの、特に最晩年について、フランシスコ会員で神学者の小高毅神父に聞いた。

— 聖フランシスコが亡くなる前には、特別な出来事が続いて起きました。

世界の教会でクリスマスに馬小屋を飾るようになった起源は、フランシスコの馬小屋と言えます。けれどもフランシスコは、見た目の良い、飾りとしての馬小屋を作ろうとしたわけではありません。飼葉おけ(プレセピオ)を据え、本物のウシとロバを連れてきて、ご降誕の現場を再現したわけです。その目的は、幼子イエスが貧しさの中、過酷な状況の下で生まれた現実を、できる限り自身の目で見極めることでした。無力な幼子は、状況を全身で受け止める以外にありません。それは徹底した天の父への従順であり、謙遜そのものの姿とも言えます。フランシスコは、幼子に対する共苦共感の思いにその心はとろけ、幼児が口にするような甘く優しい言葉で幼子イエスに語りかけていたと記録されています。フランシスコはベツレヘムで起こった出来事を、集まった人々と一緒に、まさに体験したのです。

— 貧しさが従順や謙遜とつながるのですね？

フランシスコの貧しさは物質的に質素であるだけでなく、神と教会の前に自分を小さな者とする謙遜と結び付いていました。当時、貧しい生活を求める運動は、ほかにも起こっていました。実は聖職者の墮落が横行し、運動はその反動として信徒の間で起こった教会刷新運動という一面も持っていました。やがて聖職者に暴行したりする事態が起こり、その信徒たちは教会を離れてしまいます。しかしフランシスコは全く違う道を歩みます。終生司祭にならず修道士として生きたフランシスコは、どんな司祭に対しても、その司祭の許可がなければその小教区で説教をしませんでした。むしろ司祭職に敬意を表したのです。根底には、馬小屋での体験とつながる、聖体の秘跡への理解がありました。

イエスの降誕は、神の子が人となったということですが、この「受肉の神秘」をフランシスコは非常に大切に捉えます。そして神の子の受肉を目に見える形で自分たちも体験できるのが、ミサごとの聖体だと理解します。この聖体を授ける人として聖職者を尊重したのです。そこには物質的に貧しくなるだけでなく、神の深い愛を知り、教会を尊び、小さい自分を自覚するフランシスコの信仰があったと言えるでしょう。

— 聖痕はどのようにして与えられたのでしょうか。

1224年9月半ば、イタリア中部になるラ・ベルナという小高い山でのことです。フランシスコが40日間の断食をしながら祈っていたところ、六つの翼を持つセラフィム(天使)の姿をしたキリストが現れます。そのキリストの傷痕から光のようなものが発せられて、フランシスコの体に傷痕が残されたといいます。両手両足、そして脇腹に。

フランシスコは最初、それを隠そうとします。でも隠しきれません。理由は聖痕の形にありました。聖痕というと、多くの人はいきが抜かれた傷跡を想像するのではないのでしょうか。でも実際に間近

で見た人々の証言によれば、フランシスコの聖痕は違ったのです。

手と足に、くぎが出現しました。くぎは左右の手のひらと足の甲から打ち込まれた形で、その先端は反対側に突き抜けていました。くぎの先端は折り返されたように曲がり、再び肉に達していました。くぎは輪のようになり、真ん中には指を通せるほどの隙間もあったといいます。それが足の裏にもあったのですから、当然歩けません。その状態でおよそ2年間生き、体調の良いときはロバに乗せてもらい説教してもらっています。



小高毅神父

もう一つは、やりで刺し貫かれたキリストの傷がフランシスコの脇腹にも現れ、そこからは血が流れ出ました。衣服を洗う際に付き添った兄弟たちがそれに気づき、脇腹にも聖痕が刻まれたことを確信したと記録されています。

— 大変な痛みと苦しみだと思いますが、聖痕にはどのような意味があるのですか？

フランシスコは、キリストの歩んだ道を自身も歩むことを強く願って求めています。聖痕を受けたことで、フランシスコは十字架上のイエスの痛み、苦しみ、悲しみを自身の体で体験したのだと思います。

ある時、あまりの苦痛にフランシスコは主に助けを求めます。すると主が答えてくださり、「ご自分の国をお与えくださるとの保証を得た」と語っています。私は、フランシスコほどの人が、自分が天国に入れることを保証されたからといって喜ぶとは考えられません。別の機会に、「私ほどみじめな罪人はいない」と言っていたフランシスコは、その自分が救われるのだとすれば、全ての人が救われると確信を持ち、それを喜んだのではないかと思います。

神が創られた世界は、もともと調和そのものであり、苦しみはありませんでした。しかし「創世記」にあるように、人間の罪の結果として、男女、兄弟姉妹の関係は断ち切れ、大地は呪われました。それを修復したのが主キリストの十字架でした。

聖痕を身に受けたフランシスコは、主の十字架の死は、自分だけでなく、全ての人を一人残らず救うものだと確信したのではないのでしょうか。



記事全文

十字架を担いで「道行」 聖フランシスコ没後800年に さいたま教区・桐生

さいたま教区(山野内倫昭司教)では、聖フランシスコ年の行事の一つとして5月9日、群馬県の桐生研修センター「フランシスコの家」で十字架の道行を行い、約40人が参加した。ここはかつてフランシスコ会の修道院として自然豊かな山中に造られた。敷地内の遊歩道に、「十字架の道行」全15留の各場面を表す、等身大の石像やレリーフ(浮き彫り)が配置されている。約25キロの十字架があり、担ぐこともできる。参加した人からは、「十字架を担いでみて、その重みを少し感じる



ことができた」「自然の中での道行は、聖堂内とはまた違い、ゆっくり黙想ができた」などの感想があった。



記事全文

国内

シナピスのビスカルド篤子さん「人間の尊厳賞」受賞



ロバート・キサラ南山大学学長と松浦ビスカルド篤子さん(主催者提供)

南山大学(設立母体・神言修道会/名古屋市)が、建学の理念「人間の尊厳のために」の実現に多大な貢献を果たしている人物や組織等を表彰する「人間の尊厳賞」。第5回受賞者に信徒の松浦ビスカルド篤子さんが選ばれ、5月20日に同大学で表彰式と記念講演会が行われた。

ビスカルドさんは大阪高松教区社会活動センター「シナピス」副センター長で、日本で暮らす外国人や難民の支援に30年以上携わってきた。講演でビスカルドさんは、かつて東南アジアから来た女性たちが窮地に立たされた時、体を張って助けた司祭の姿に心を動かされた体験を話し、その後、弱い立場に置かれた人々の力になろうと活動を続けてきたことを語った。



記事全文

「風の家」創設40年 日本人の心に届くイエスの顔を模索



奥右から若松英輔さん、片柳弘史神父(イエズス会)、山本芳久さん、小宮一航さんと司会の山根道公さん

故・井上洋治神父(東京教区)創設の「風の家」(通称「風の家」)運動40年を記念する集い(「風の家」主催)が5月30日、東京・千代田区の幼きイエス会ニコラ・バレで開催された。この運動は、井上神父が作家の遠藤周作と志を共にし、「日本の文化的風土のなかにイエスの福音が根をおろし、開花すること」を目指すもの(『風』編集室ウェブサイトより)。記念ミサは、井上神父の志を継いで「信州 風の家」を主宰する伊藤幸史神父(新潟教区)が主司式。批評家で詩人の若松英輔さんによる記念講演のほか、創設当時を知る人らを交えた座談会と祝会が行われた。約100人が参加した。



記事全文

世界広報の日記念講演会 AIに関する教皇の言葉から学ぶ



講演した澤田豊成神父(奥)

「世界広報の日」(今年は5月10日)を記念する講演会が6月6日、聖パウロ修道会若葉修道院(東京・新宿区)で開かれ、信徒ら100人余りが参加した。教皇レオ14世は今年1月に発表した世界広報の日のメッセージで「人間の声と顔を守る」よう訴えた。その意味を澤田豊成神父(聖パウロ修道会)が解説。「声」と「顔」は人間一人一人の特徴や固有性と結び付く大切なものであり、教皇は、AIが人間性を守るために使われているのかを問うていると語った。私たちがAIとの付き合い方を考える必要に迫られていることは「恵み」だとも話し、AIに飲み込まれないよう「自分は何者なのか」を一人一人が考えることの大切さを強調した。



記事全文

「平日にもみことばの配達」100回を超えて 福岡教区



上は「平日にもみことばの配達～普段着のあなたへ～」のホームページ。右がフィリピーニ・レナト神父



福岡教区で2021年6月から始まり、オンラインで配信される番組「平日にもみことばの配達～普段着のあなたへ～」は昨年12月、100回を超えた(6月10日現在、112回)。

この取り組みを提案したのはフィリピーニ・レナト神父(56/聖ザベリオ宣教会)。番組の制作・発信は10人の女性の有志グループ「みことば配達人」が担い、聖書のみことばと祈りのヒントを5分程度の音声で伝えている。

同教区では2019年から「主日の音声説教」が毎週、動画配信されていたが、コロナ禍をきっかけに主日だけでなく平日もみことばと接することができるようにとの願いから始まった。



記事全文

2027年WYDソウル大会 参加「仮登録」開始

2027年の夏に韓国で開催されるワールドユースデー(WYD/世界青年の日)ソウル大会の参加希望者の「仮登録」が始まった。同大会日本事務局がカトリック中央協議会のウェブサイトで呼びかけている。今回の準備はWYD「本大会」(8月3日～8日)と、その直前に韓国内の各教区で教区の人々と過ごす「教区大会」(教区での日々/7月29日～8月2日)に分けて進められる。また週末のみ参加する方法も示されている。

なおこの「仮登録」は正式な参加登録ではなく、準備の参考と今後の正式募集案内に生かすものであり、参加を保証するものではない。詳細は当該サイト参照。(右QRコードから)



国・教派を超え平和と希望歌う 歌集『みんなのさんびか1』

新しい賛美歌集『みんなのさんびか1 希望と平和』が、「NewSong 企画」から刊行された。今、特に歌いたい「平和と希望をテーマにした」歌を集めたという。昨年8月に初版を刊行。今年2月に第2版が出された。収録された全30曲は、国や教派、時代を超えて集められた。平和を願い、希望を見つめようとする歌だ。歌集の土台となったのは、日本賛美歌学会が毎年、発行を続けてきた小歌集。この学会では、賛美の歌に関心を持つ会員が、教派を超えて幅広い視点からの学びや研究を行っている。



記事全文

主日の福音解説

7月5日 (年間第14主日)

マタイ 11・25-30

イエスの賛美

今週朗読される福音は「マリアの賛歌」との対比で「イエスのマニフィカト」と呼ばれることもある。マニフィカトとは元々ラテン語で賛美するという意味だが、典礼的文脈ではこの一語でルカ福音書に由来する「マリアの賛歌」を指すことが多い。お告げを受けたマリアはエリサベトを訪問し、その喜びの中で「わたしの魂は主をあがめ(=マニフィカト)…」と神への賛美を口にする。喜びの後に自然と賛美の言葉が続く流れになっている。

ところが、「イエスのマニフィカト」の直前に喜ばしい出来事はない。マタイ福音書11章でイエスは多くの奇跡を目撃しながら、なお悔い改めなかった町々を厳しく叱責する。その直後に「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます」と祈る。このつながりは一見唐突に見える。われわれは通常、賛美とは喜びや祝福の中から生まれるものだと考えるが、イエスの場合には拒絶と不信仰を前にして賛美が出現する。これは賛美が単なる感情の高揚ではなく、根本においては神との深い結び付きを前提しているからと思われる。

この点は十字架上の言葉とも響き合う。「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という叫びは恐らく詩編22に由来する祈りと考えられているが、この詩編は壮絶な苦しみから始まり、最後には神への信頼と賛美へ向かう構造になっている。私はここにイエスの祈りの特徴があると考えてみたい。すなわち、イエスの祈りには悲嘆から始まっても、そこを越えて父への信頼へ向かうとする動きがあると。

マタイ福音書11章の祈りも同様である。イエスは不信仰な町々を憂い叱責するが、そこにとどまらず父の御心を見つめ賛美へ向かう。人々が神に心を閉ざしている現実を見つめながらも、それを摂理の中で受け止め直すのである。また今日の箇所では、神は「知恵ある者や賢い者」ではなく「幼子のような者」に御心を示されたという逆説が語られている。悔い改めなかった町々は神の言葉を聞きながら心を閉ざす。一方、「幼子のような者」は自らの力に頼らず神に心を開く。この対比の中で、一連のイエスの祈りは全てを父に委ねる信頼の祈りとして響いている。

さらにイエスは続ける。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい」。ここでイエスの賛美は新たな段階を迎える。父への信頼に立つイエスは嘆きにとどまらず、重荷を負う人々をご自分のもとへ引き寄せさせる。つまり、イエスの祈りは苦悩を出発点としながらも父へと開かれ、傷つき疲れた人々を受け入れる具体的な愛へと至るのである。

しかし、ここで注意したいことがある。これをキリスト者の祈りの模範と直ちに結論付けてしまうならば、それは少し性急であろう。大きな悲しみの中で人はすぐに賛美へと向かえるものではない。厳しい現実と直面した時には、賛美どころか祈りの言葉さえ見つかからないこともある。イエスの祈りは苦しみをすぐに乗り越えよと迫るものではない。嘆きのただ中であつても父に向かう道はなお閉ざされていないことを静かに語っているのである。そして、その道を歩めないほど疲れた者には「わたしのもとに来なさい」と呼びかけているのである。

(熊川幸徳神父/サン・スルピス司祭会)



7月12日 (年間第15主日)

マタイ 13・1-23 または 13・1-9

「神が培う豊かな土地」

今日の福音は「種を蒔く人」のたとえ話です。これはイエス様が弟子たちにその意味を直接的に説明して下さったたとえ話としても有名です。このたとえ話を通してイエス様が言いたかった中心的なメッセージは、「み言葉を聞いて悟ることによって実を結ぶ人になささい」ということでしょう。

そういうことで、私たちはこのたとえ話をより深く考えなければなりません。私たちは皆、既に言葉の種を受けています。しかし、イエス様のお話のように、ある人はその種が深く根付かなかったので、すぐに枯れてしまい、ある人は世のいろいろな心配や悩みでその言葉が息づくことを妨げてしまいます。また、ある人はその言葉を大切にせず、暮らしの中で失ってしまいます。この話を聞いて誰が「自分には当てはまらないことだ」と確信をもって言えるでしょうか。

もし、今の自分が道端や石だらけの所、あるいは茨でふさがれたような状態だとしたら、どうすればいいのでしょうか。私たちが皆良い土地であればいいのですが、実際の私たちの生活は良い土地というより、石だらけの所や茨の中の方に近いでしょう。もちろん、皆がイエス様のお話のように良い実を結ぶことを望んでいますが、思いのままにうまくいかないのが私たちの現実です。

今日の第一朗読で預言者イザヤはこう言います。「雨も雪も、ひとたび天から降れば、おなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える」。雨と雪は一般的に私たちが経験するあらゆる試練を意味します。このような試練がむしろ言葉の種がまかれる私たち自身を豊かな土地としてくれるという意味です。しかし、この試練は私たちが意図したり、作り出したりするものではなく、神様が与えてくださることでなければなりません。今日の答唱詩編ではこう歌います。「あなたは地を訪れて喜ばせ、豊かな実りでおおわれる。大空に水を蓄え、地に水を注いで麦をあたえられる。田畑に水を送り、土くれをならし、夕立で地を潤して作物を祝福される」。これは、神様はやせ地のような私たちに水を注ぎ、ならし、豊かな土地となるように培ってくださるという信仰を表します。

石だらけのやせ地や茨の中が豊かな土地となるためには大変苦しい時間が必要です。石を取り去り、茨を全て取り除き、言葉の種でなくものを根こそぎにしなければなりません。このすべての業を行う方はイエス・キリストです。イエス様がこの業を私たちのうちに行われる時、私たちは苦しみと痛みを味わうかもしれません。ところが、最後までキリストのうちにとどまり、耐え忍ぶならば、私たちは神が培う豊かな土地となるのです。この土地でみ言葉が息づくことができるようになれば、わたしたちはこれまで見たことのない良い実を結ぶことになるのです。百倍の実を結ぼうが、三十倍の実を結ぼうが、重要ではありません。たった一つの実だけでも私たちが結んだ良い実はいずれ、農夫である神のものだからです。

(ダニエル・キム・ドンウク(金桐旭)神父/韓国殉教福者聖職修道会)



主日の福音解説

7月19日（年間第16主日）

マタイ 13・24-43 または 13・24-30

そのままに

今日の福音の種まきの話などでは「人にはよい人、悪い人がいる。私たちの心には、よい心、悪い心がある」と私たちを主人公として解釈してしまいがちですが、福音を読むときには、誰が主人公なのか大切です。福音の主人公はイエス様です。

私たちは今までと違う、いつも通りではない、普段の生活を乱すもの、それらを非常に恐れてしまう時があります。この普段通りを壊すものを毒麦と決め付ける。この毒麦のせいで、私のいつも通りが乱された。だから、普段の生活を壊す毒麦を私たちはすぐに抜き取らないといけないと。

イエス様は生まれてすぐにいのちを狙われます。自分たちの今まで通りを壊す者として。イエス様は必要とされず、排除されそうになります。他の箇所でもイエス様は何度も「受け入れてはいけない、必要のない存在」とされています。

徴税人や罪人の仲間だと非難される（マタイ9・9-11）
悪霊の力を使っている（同12・22-24）など。

今日の福音のすぐ後にもつまずきとして故郷、家族に受け入れられないイエス様の姿（同13・53-58）があります。誰かを悪者（毒麦）として自分たちに必要のない存在として決め付けてしまう言葉と行い。「あなたはわたしにとって必要のない人です」と決め付けることはイエス様のお伝えになられる福音（よい知らせ）ではありません。

すべてに心を配る神はあなた以外におられない。（知恵の書12・13）



毒麦を抜こうとする者に、「育つままにしておきなさい」（マタイ3・30）と主は言われたとあります。この「そのままにして」は6章9節から13節、「主の祈り」の「赦してください」と同じ単語です。ゆるす、ゆるさないという意味だけでなく、「そのままにしておいてはどうですか？」「そのまま行かせてあげなさい」と私たちの心をやさしくする言葉です。「その

まま受け入れる」ことは神様のお望みであって、私たちにとって毎日ささげる祈りです。

神に従う人は人間への愛を持つべきことを、あなたはこれらの業を通して御民に教えられた。（知恵の書12・19）

必要とされず、受け入れられない、命まで奪われようとされているイエス様を、マリア様とヨセフ様は命懸けでお守りになりました。人は皆、大切にされる必要な存在です。

あなたが気に入らなくても「そのままにしておくことはできないの？」と聖家族は私たちに今日も語りかけておられます。

（寺浜亮司神父／福岡教区）

7月26日（年間第17主日）

マタイ 13・44-52 または 13・44-46

天の国のたとえ

マタイ福音書の13章にはイエスのたとえ話がまとめて収められています。その締めくくりとなる四つのたとえを語っているのが本日の福音の箇所です。

一つ目の「畑に隠された宝を見つけた人」と、二つ目の「高価な真珠を見つけた商人」のたとえは天の国についてです。天の国とは場所や空間のことではなく、「神が支配する」という意味で、状況や状態のことです。

神の支配（望み）が実現している状況・状態が天の国です。二つのたとえに共通しているのは宝を見つけたとき、また高価な真珠を見つけたとき、「持ち物をすっかり売り払ってそれを手に入れた」ということです。隠されていた宝を見つけた者の喜び、探し求めていた真珠を見つけた者の喜びが強調されています。それほどまでに天の国は価値のあるものだということです。



もう一つ考えられるのは私たちとキリストとの関係です。宝や真珠は私たち一人一人のことです。宝を見つけた人、真珠を探していた商人とはキリストのことです。神は私たち一人一人のことを、価値ある者として探し求めておられるということです。神が人間を探し求めているというテーマはほかの福音書の中にも見られます。

三つ目のたとえ話も天の国についてですが、前の二つとは内容が違います。天の国は「湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める網」にたとえられています。網が投げ降ろされて魚を集めるのは、全ての人は神によって天の国に招かれていることを教えています。しかし、集められた魚が良いものと悪いものに選り分けられるのは、招かれたけれども天の国に入れない者もいるということでしょう。ここでは終末の裁きが暗示されています。マタイ福音書における裁きの特徴は二つに分けられることだと説明されています（マタイ25・31-46参照）。

最後にイエスは「天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている」と言っています。天の国のことを学んだ学者とは弟子たちのことです。一家の主人とはイエスのことです。イエスの弟子になるには天の国のことを学ぶ必要があること、それを続けるならばイエスに似た者になれるということでしょうか。ありがたい励まします。古いものとは旧約の教え、新しいものとはイエスによってもたらされた天の国の価値観です。

（立花昌和神父／東京教区 カットは全て高崎紀子）

文化

【名著誕生展 ヴァチカン教皇庁図書館Ⅲ+】 バチカン図書館との交流も紹介 印刷博物館（東京）

国内外の印刷の歴史や文化、技術の進歩の過程などをさまざまなテーマで展示している印刷博物館(東京・文京区)で、企画展示「名著誕生展 ヴァチカン教皇庁図書館Ⅲ+」が7月20日まで開催されている。同博物館の運営母体は総合印刷会社TOPPANホールディングス株式会社。

同社では2000年に創業100年という節目を迎えることになり、社会貢献の一環として文化施設を造る準備を進めていた。そのためにまず先人に学ぼうと世界中の文化施設に手紙を送ったところ、答えがあった施設の一つがバチカン図書館だった。

1997年に同社職員がバチカンを訪れ、自社の「高精細デジタルアーカイブ」(貴重資料の高精細デジタル化)技術を紹介すると、やがてバチカン図書館から所蔵資料のデジタル化の相談を受けた。こうして始まった交流の結果生まれたのが、希少な『グーテンベルク42行聖書』の高精細デジタルアーカイブだった。今回の企画展示でもそれが紹介されている。

同博物館では過去に2回、バチカン図書館から貸し出された資料の展示を行ってきたが、バチカン図書館との協力と交流について特に表に出してこなかった。3回目となる今回は、成果を展示に取り入れ、タイトルに付けた「+」で表しているという。



記事全文

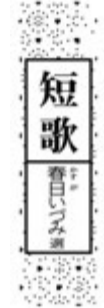


タイトルの「+」に当たるバチカン図書館との交流に関する展示

「満ち満てる」目に見る如き語感にて休む前には祝詞をとなく

金の牛AIと化し現れるそは神と成す術無きものを
水摂取制限されてこの初夏はひとしほ沁みる聖歌一四四番
神の声我が身に届き雪の朝四十四にして主と歩む幸
黒澤の名画にありし水車小屋山葵田薫りゴトリと鳴りき
音立てて夜中の道路を爆走す若者銀河に飛ぶかのごとく
嵯峨野なる小寺の庭にひそやかにクリスタン灯一つ建つ見ゆ
あけぼのの輝く空が攻撃の色とかさなり涙こぼるる

東久留米 平山 努
美唄 小川ますみ
川崎 印出美由紀
さいたま 横山 早織
横浜 永井 榮司
熊本 矢澤 麻子
浦安 篠塚 歴山
札幌 水島 洋子



毎月5日まで(必着)、はがきに3首以内、1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



毎月5日まで(必着)、はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



◎萌えたちて燃えたちてなほ躑躅かな 秦野 小泉早由美
◎校門に写真撮る列入学式 和泉 中里 君子
【評】入学式での家族の喜びが伝わってくる。
夏服の一際大きき貝釦 東京 山口 岳人
復活祭ただ一人居る小聖堂 浦安 篠塚 歴山
日の零優しく溶かし水温む 神戸 平尾 孝子
永遠の今の生命や風光る 伊丹 上野 津子
喜びに声弾む友風光る 仙台 三宅 温子
名古屋城濠の桜にはねる鯉 名古屋 成田 友子
緑蔭や教皇の声ふかぶかと 西宮 井田 國敬
獄中の受洗記念日難祭 大分 水嶋 茂士
手垢つく聖書開きて鳥帰る 芦屋 平田 ひろみ
菜畑に初蝶の舞軽きかな 福岡 三谷 淑美
自動ドア一步に開き新緑裡 豊中 岩田 都世
夏近し広き聖堂上着脱ぐ 府中 荒井 美邦
少年の美しき歌声復活祭 大阪 大町 久美
うららかなや座ればすぐに睡魔来る 春日井 遠藤 晶子
けふ一日心しづかに花の雨 大分 諸富 礼子
ふと忘る祈りの言葉春煖炉 長崎 川端 一範
柿若葉色の定まりゆく仔細 選者吟

きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク) 7月

【教皇の意向：人命の尊重】

人生のあらゆる場面において人命が尊重され、保障されますように。そして、人命は神からの賜物であることに気づくことができますように。

【日本の教会の意向：被造物、地球環境】

神によって造られたすべてのもののために祈ります。私たちが神に生かされ、神とつながっていることを意識しながら、被造物と地球環境を大切にしていけることができますように。

AIと人間についての回勅『マニフィカ・ウマニタス』発表の場で、教皇レオ14世は「全ての人は唯一無二であり、代

替不可能な存在です」と述べ、AI時代にあって人間をデータに置き換えようとする考えを退けました。人間の命は神からのたまものであり、神に向かって開かれ、人格的な交わりと愛を豊かに育むよう招かれています。人間の命の尊さは「何ができる」「どれだけ持っている」を超えて、「在ること」そのものにあります。だからこそ、胎児、重度の障がい者、認知症や終末期の人たちを命の尊厳を持つ存在として大切にしていけることが求められます。スペイン訪問で教皇が述べたように、人類が持つ共感し愛する能力を決して放棄してはならないのです。たまものとしての命を守っていけるよう祈りましょう。

神は、この世界とそこに生きる全ての命を愛をもって創造され、私たち人間もその大きな交わりの中に生かされています。前教皇フランシスコは『ラウダーテ・デウム』において、地球環境の危機は単なる自然の問題ではなく、人間が神とのつながりや被造物との深い絆を忘れてしまったことから生じる霊的な危機でもあると語っています。私たちは自然を自分の利益のためだけに利用するのではなく、神から託された大切な贈り物として受け取り、感謝と節度をもって守り育てるよう招かれています。未来の世代へ豊かな地球を受け渡していけるよう祈りましょう。

訃報

中村ツギ子修道女(純心聖母会) 5月1日、誤嚥(ごえん)性肺炎のため逝去。95歳。1931年長崎県生まれ。22歳で同会修練院に入所し、56年初誓願。65年終生誓願。初誓願後は長崎、浦和(埼玉)、川内(せんだい/鹿児島)、名古屋(愛知)の同会修道院で炊事を担当した。温和人柄で芯が強く、誠実で努力家でもあり、それが仕事のやり方に表れていた。74年にときわ荘修道院が開設されると職員として調理場に勤務し、77年からの44年間は恵の丘修道院で奉仕。炊事の合間に聖堂の花を生け、同会が運営する施設の利用者と共にぬいぐるみ作りに励むなど、全ての仕事に誠心誠意を尽くした。2021年からはロザリオの聖母修道院で穏やかに療養していたが、25年12月から体調を崩し入院した(以上長崎)。4月の終わりに容体が悪化し5月1日早朝、御父のみもとに召された。



石田尚子修道女(ノートルダム教育修道女会) 5月11日、京都市内の病院で膵臓(すいぞう)がんのため逝去。96歳。1929年兵庫県生まれ。49年同会入会。52年初誓願。ノートルダム女学院中学高等学校(京都)、仁川学院小学校(兵庫)、海星小学校(沖縄)、みこころ学院(愛知)で、事務職員や宗教・国語・英語の教諭、校長として奉職した。同会の修練長・高齢会員の介護担当者として、会員の養成、病者・高齢者の責任者や同伴者として奉仕



した。教会使徒職では、聖書や書道も教えた。同会の日本人最初の入会者4人のうちの、最後の存命者だった。優しく物静かで、誠実で慈愛に満ちた態度で全ての人に接した。山内清海(きよみ)神父(長崎教区) 5月19日、長崎市内の高齢者施設で誤嚥(ごえん)性肺炎のため逝去。90歳。1935年長崎県生まれ。61年司祭叙階。64~89年福岡サンスルピス大神学院で教授、院長を務めた(福岡)。89年6月大崎主任。92年5月からお告げのマリア修道会付司祭となり、長崎純心大学・大学院教授、長崎大学講師を歴任。2019年引退(以上長崎)。長年にわたり、国内外で身に付けた学識をもって神学院や大学の教壇に立った教育者だった。生涯のほとんどを司祭・修道者の養成と、神学・哲学に基づく研究にささげた。多数の本を著し、宗教の枠を超えて一般の人々にも向けた講演会を開き、引退後も現代社会のさまざまな問題の中でどう生きるかを模索するための言葉を語り続けた。唯一、主任司祭を務めた大崎小教区では、子どもたちとの関わりを通して召命促進に尽くし、後進の司祭・修道者の育成に実りをもたらした。さまざまな現場で人々の心に寄り添った温かな司祭でもあり、豊かな知性と深い信仰による教育は多くの人々を引きつけた。フランス人哲学者との出会いによって「長崎からの平和の発信」の必要性を確信し、平和構築を強く訴え続けた。



した。教会使徒職では、聖書や書道も教えた。同会の日本人最初の入会者4人のうちの、最後の存命者だった。優しく物静かで、誠実で慈愛に満ちた態度で全ての人に接した。

山内清海(きよみ)神父(長崎教区) 5月19日、長崎市内の高齢者施設で誤嚥(ごえん)性肺炎のため逝去。90歳。1935年長崎県生まれ。61年司祭叙階。64~89年福岡サンスルピス大神学院で教授、院長を務めた(福岡)。89年6月大崎主任。92年5月からお告げのマリア修道会付司祭となり、長崎純心大学・大学院教授、長崎大学講師を歴任。2019年引退(以上長崎)。長年にわたり、国内外で身に付けた学識をもって神学院や大学の教壇に立った教育者だった。生涯のほとんどを司祭・修道者の養成と、神学・哲学に基づく研究にささげた。多数の本を著し、宗教の枠を超えて一般の人々にも向けた講演会を開き、引退後も現代社会のさまざまな問題の中でどう生きるかを模索するための言葉を語り続けた。唯一、主任司祭を務めた大崎小教区では、子どもたちとの関わりを通して召命促進に尽くし、後進の司祭・修道者の育成に実りをもたらした。さまざまな現場で人々の心に寄り添った温かな司祭でもあり、豊かな知性と深い信仰による教育は多くの人々を引きつけた。フランス人哲学者との出会いによって「長崎からの平和の発信」の必要性を確信し、平和構築を強く訴え続けた。

人/日本聖書神学校講師)。作品=山本周五郎『赤ひげ診療譚』(新潮文庫)。作品を前もって読んでくることが望ましい。下記連絡先へ要事前申し込み。1,000円。電話03-3207-6198 日本クリスチャン・アカデミー関東活動センター

▶慈しみ深き会主催「沈黙の祈りのつどい」 7月23日(木)午後1時30分~3時30分、イエズス会岐部ホール404号室(麴町教会隣接)。指導:九里彰(くのり・あきら)神父(カルメル修道会)。故ウイリアム・ジョンストン神父(イエズス会)の『愛と英知の道』から講話後、沈黙で祈る。申し込み不要。無料(献金歓迎)。電話042-473-6287(午前11時~午後7時) 篠原

▶青年の祈りのひととき 7月24日(金)午後6時30分~、フォコラーレ 男子本部。祈り、分かち合い、茶話会。対象=18歳(高校生は除く)~35歳でカトリックの祈りや信仰に心が向いている人(宗教不問)。参加司祭=小田武直神父(東京教区)。下記QRコードから要申し込み。電話080-8259-0993 東京教区教皇庁宣



教事業(MISSIO TOKYO)田所

■千葉 ▶「ルワンダの復興と共に歩む一義足を作り続けて」 7月11日(土)午後2時~3時30分、カトリック船橋学習センター・ガリラヤ講座室(定員35人)。講師=ガテラ・ルダシングワ・エマニュエル(ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト ルワンダ事務所代表)、ルダシングワ真美(同プロジェクト日本事務所代表)。ウェブサ

イト、あるいは氏名、電話番号、希望講座名を明記し、メール(galilea@adagio.ocn.ne.jp)、電話(047-404-6775)、ファクス(047-404-6778)または郵送(〒273-0011 船橋市湊町1-2-21ケイ・ジビル301カトリック船橋学習センター・ガリラヤ)で要申し込み。無料(寄付歓迎)。電話047-404-6775ガリラヤ

■兵庫 ▶好善社主催 講演会「ハンセン病療養所と朝鮮の人たちについて」 7月4日(土)午後2時~4時、日本キリスト教会西宮中央教会(兵庫県西宮市)。講師=金貴粉(きん・きぶん/国立ハンセン病資料館・主任学芸員)。無料。電話03-3712-3845 好善社

▶生きづらさを抱える若い女性たちへのセーフスペースづくりサポーター養成研修「はじめて学ぶ社会的養護—こどもたちの暮らしと自立後の若者の現状—」 7月25日(土)午後1時30分~3時30分、日本基督教団神戸聖愛教会(神戸市)またはオンライン。内容=社会的養護の基本的なしくみを知り、こどもたちの暮らしや自立後の若者が直面する現状について理解を深める。講師=芦田拓司(西日本こども研修センターあかし・研修企画専門員)。7月22日(水)までに下記QRコードから要申し込み。会場定員30人(先着順)。会場定員を超えた場合は、オンライン参加となる。一般2,000円、学生1,000円。電話078-231-6201

office@kobe.ywca.or.jp 神戸YWCA自立援助ホーム準備委員会(担当:西本)



告知板

■宮城

▶仙台白百合女子大学創立60周年特別講演会・感謝ミサ 7月4日(土)午後1時30分~2時40分(講演)・午後2時50分~3時45分(ミサ)・午後4時~5時(祝賀茶話会)、仙台白百合女子大学講堂(祝賀茶話会はステラマリスセンター)。講演演題=「カトリック大学の使命と現代の教会—シノドスと宣教の展望」。講師=菊地功枢機卿。下記QRコードから7月2日(木)までに要申し込み。無料。電話022-372-3254 仙台白百合女子大学総務課



■東京

▶高麗博物館企画展「いのち、愛、平和の童話作家 権正生(クオン・ジョンセン)」 6月27日(土)から12月27日(日)まで、高麗博物館(新宿区)で開催。開館時間=正午~5時(入館は午後4時30分まで)。休館日=月曜日・火曜日。入館料=一般500円、高校生・大学生・30歳未満200円、障がい者および同伴者200円、中学生以下無料。講演会などの予定は同館ウェブサイト(右記QRコード)参照。電話03-5272-3510 高麗博物館



▶連続セミナー「環境と貧しい人々」 ①7月1日(水)午後6時30分~8時、麴町教会ヨセフホール。テーマ=「ともに生きるために行動する」講師=鈴木和枝(不二聖心女子学院教員)。②7月15日(水)午

後6時30分~8時、麴町教会ヨセフホール。テーマ=「まとめと展望」講師=梶山義夫神父(イエズス会社会司牧センター所長)。無料。電話03-5215-1844 office@jesuitsocialcenter-tokyo.com イエズス会社会司牧センター

▶ボランティア養成講座「聴くことで『隣人』になる」 7月4日(土)午後1時~4時、カトリックセンター1階センターホール(東京カテドラル関口教会構内。正門に入って右手)。内容=「自分を整える—自己理解 他者理解のために」。講師=川村浩子(精神保健福祉士/公立学校学校運営協議会委員)。電話(03-3943-1726)または下記QRコードから要申し込み。1,500円。電話03-3943-1726(月~土<祝除く>、午前10時~午後2時) 東京カリタスの家



▶写教の会(その日の福音を毛筆で写し、心を主に向ける集い) 7月19日(日)午後4時30分~5時50分、イエズス会岐部ホール309号室。主宰=高橋登志子修道女(聖心会)。持参する物=筆ペン、文鎮、下敷き30x50cm(フェルトまたは新聞紙)。7月16日(木)までに要参加申し込み。500円(自由献金)。phostere@gmail.com 古賀

▶読書会「キリスト教と文学」 7月21日(火)午後2時~3時30分、日本クリスチャン・アカデミー会議室(新宿区)。講師=柴崎聰(詩

番組

ラジオ心のともしび

(朗読・坪井木の実)

7月の放送日と執筆者 1日(水)松本准平(じゅんぺい)・2日(木)こいずみゆり・3日(金)竹内修一(おさむ)・4日(土)熊本洋(よう)・6日(月)岸本景子・7日(火)中島貴幸・8日(水)三宮麻由子・9日(木)許書寧(きよ・しゅにん)・10日(金)古川利雅・11日(土)崔友本枝(ちえー・ともえ)・13日(月)服部剛(ごう)・14日(火)山本久美子・15日(水)コリーン・ダルトン・16日(木)中井俊巳・17日(金)萩原久美子・18日(土)古橋昌尚・20日(月)

今井美沙子・21日(火)松浦信行・22日(水)村田佳代子・23日(木)岡野絵里子・24日(金)森田直樹・25日(土)植村高雄・27日(月)堀妙子・28日(火)片柳弘史・29日(水)山本ふみり(以上テーマ「根っこ」)・30日(木)下宥優美(しもさこ・ゆうみ)「気づき」・31日(金)越前喜六「自然に親しむ」。

ウェブサイト(下記QRコードでアクセス可)では24時間視聴可能。心のともしび、詳細は電話075-211-9341。



Table with columns: ラジオ YBU 心のともしび 5分, 放送局, 放送日(曜日)時間, 放送局, 放送日(曜日)時間. Lists radio stations and broadcast times for the program.